

## 第21回 先端加速器科学推進シンポジウム

日 時：平成26年1月23日

場 所：つくば国際会議場

共 催：高エネルギー加速器研究機構

テーマ：先端加速器から始まるイノベーションとノーベル賞

参加者：180名

概 要：

2014年1月23日(木)つくば国際会議場(エポカル、つくば市)にて、先端加速器科学技術推進シンポジウム「先端加速器から始まるイノベーションとノーベル賞」を開催した。2013年ヒッグス博士とアンダール博士をノーベル物理学賞に導いた先端加速器が、素粒子物理学のみならず、他分野の科学研究や産業応用など幅広く活用できる大きな可能性を秘めていること、そしてその大いなる可能性について意見が交わされた。

藤本順平氏の講演冒頭では、20世紀初頭にその成果により3つのノーベル賞をもたらした、その後の素粒子観測原理の基礎となった実験装置「霧箱」の観察を行った。来場者は、放射線が目に見える様子を興味深く観察していた。

アステラス製薬の阪下氏は、創薬にどのように放射光が係っているのかを紹介。黒田氏は、加速器が応用されている産業分野について、医療や食品の滅菌等、具体例を挙げて解説した。

参加者は、翌日から開催されるつくばテクノロジーショーケースの参加企業や、高校生の団体等、通常と異なる層であり、終了後に様々な意見が寄せられた。産業界からの参加者からは、「技術の互換性を確保できればシェア拡大につながると思う」「思った以上にこの機械の使いみちがあることがわかった」「産業界への活用をもっとアピールすると理解してもらいやすいかもしれない」など、今後の加速器技術の広がり期待できるコメントがあった。高校生からは「加速器がどういうものなのか今までよく知らなかったが、これからもっともっと役立つものになり、人間が生きていくために必要なものだということが分かった」「ぜひ暗黒物質やクォークなどまだ見つかっていないものを見つけて、宇宙の起源のなぞを解き明かしてほしい」など、興味を深めてもらえたようである。